

第3章 植物

はじめに

当別町内における植生分布を考えるうえで重要な要素が、地域別の土地利用や気候である。この観点から町内を大きく区分すると、広大な低地そして田園地帯が広がる南部地域（本町地区市街地、太美地区、東裏、蕨岱、川下、当別太など）と、丘陵や山岳が広がり森林に覆われた中北部地域（弁華別、茂平沢、金沢、中小屋、高岡、スウェーデンヒルズ、青山など）に分けることができる。第1節と第2節では、上記の2地域ごとの植生分布の特色と、その成因について述べる。

第1節 南部地域の植生分布

住宅地の樹木と草花

当別町の平野部・低地帯は、現在までに大部分が宅地や農地として開発されている。開発以前には、湿地帯と落葉広葉樹の巨木の森が多かったようであり、例えば東裏ではヤチダモ、ハルニレ、イタヤカエデ、ミズナラ、カツラの、直径1.5mを超える巨木が多かったとの記録がある。潜在自然植生として、湿原植生のほかに、多湿地に成立した冷温帯落葉広葉樹林が存在した。

このような樹木は、農地や宅地として開発されていく中で、ほとんど皆伐され、今日の市街地の近傍では、観察される樹木の大部分が人為的に植栽されたものか、伐採跡地に二次的に生えたものである。このような自然林の名残としては、ハルニレやハンノキ、ヤチダモ、ミズナラ、ヤマグワなどが多少見られる程度である。植栽樹種は様々なものが見られるが、主な樹種を次頁表1に、庭の草花を次頁表2に示す。

表1 住宅地の樹木

公園・街路樹等	アカエゾマツ、オオモミジ、オオヤマザクラ（エゾヤマザクラ）、カラマツ、サトザクラ‘関山’（八重桜の代表的品種）、シラカンバ、ソメイヨシノ（サクラ）、トドマツ、ナナカマド、ニセアカシア（ハリエンジュ）、ネグンドカエデ、モミジバズカケノキ（プラタナス）、ヤチダモなど
個人宅や社寺	アカマツ、アジサイの栽培品種、イチイ、イチョウ、イボタノキ、イングリッシュレンジャー、エゾムラサキツツジ、オウゴンシノブヒバ、クリ、キリ、クロマツ、コノテガシワ、シンジュ（ニワウルシ）、スモモ、ドイツトウヒ（ヨーロッパトウヒ）、ドウダンツツジ、ニオイヒバ、ハウチワカエデ、ハクサンシャクナゲ、バラの栽培品種、フジ、ムラサキハシドイ（ライラック）、ヤマモミジとその近縁種、レンゲツツジ、ヨーロッパアカマツ（オウシュウアカマツ）など

※学名等は省略した

表2 住宅地の草花と野菜

庭先の園芸植物	イヌサフラン（コルチカム）、インパチェンス、ギボウシの仲間、グラジオラス、クロッカス、コスモス、サルビア、シバザクラ、シャクヤク、ジャーマンアイリス、セイヨウアサガオ、ダリア、チューリップ、ハナショウブ、ヒマワリ、ヒヤシンス、ペゴニア（センパフローレンス系）、ペチュニア、マルバアサガオ、マリーゴールド、ミヤコワスレ、ムスカリ、ユリ属の栽培品種（特にオリエンタル系とアジアティック系の品種群、シンテッポウユリ）、ラッパズイセンの仲間の栽培品種など
家庭菜園	アスパラガス、インゲンマメ、ウド、エンドウマメ、カブ、カボチャ、キャベツ、キュウリ、シソ、ジャガイモ、スイカ、ダイコン、ダイズ（枝豆を含む）、トマト、ナス、ニンジン、ニラ、ニンニク、ネギ、ハクサイ、パセリ、ピーマン、ブロッコリー、ホウレンソウ、ミョウガなど

※学名等は省略した

外来植物の侵入

自生の草本類としては、公園などに残されたわずかな林の中に、オオハナウドやオオウバユリ、オオバナノエンレイソウ、エゾエンゴサクなどが多少残存し、開けた草原や川沿いにススキ、ヨシ、オオヨモギ、オオイタドリなどが茂るほかは、良く目につく草本植物は外来種が占める割合が多い。

特に路傍には、しばしば牧草や芝生として持ち込まれた外来植物が優占している（表3）。

表3 牧草や芝生として持ち込まれた外来植物（カッコ内は牧草としての流通名）

ムラサキツメクサ（アカクローバー）、シロツメクサ（シロクローバー）、カモガヤ（オーチャードグラス）、ウシノケグサの仲間（フェクス類）、オオアワガエリ（チモシー）、ナガハグサ（ケンタッキークローバー）、コスカクザの仲間（レッドトップ）
--

※学名等は省略した

河畔林、防風林の豊かな下層植生

防風林ではヤチダモとシラカンバが多く、アカエゾマツやトドマツ、外来種のドイツウヒなども見られる。地下水位が高いためか、植栽樹種の生育が不良だったと思われる例も散見され、特に泥炭層が発達している箇所には、天然更新とみられるハンノキに置き換わっている場所もある。

当別川や石狩川などの河畔林には、オノエヤナギやキヌヤナギ、エゾノカワヤナギ、バッコヤナギを主とするヤナギ類と、ケヤマハンノキが多い。また、少数ながら比較的若齢なドロノキも散在する。より水際に近い場所にはタチヤナギやハンノキが、やや原野的な開けた場所にはエゾニワトコやマユミ、ノリウツギ、イヌコリヤナギ、タラノキといった低木類や、強い風や日差しを受けて低木～亜高木として生育するヤマグワが点在する（写真1）。



写真1 当別川河畔林（川下）

これら防風林や河畔林では、表土や地形が開拓以前の状態を留めている例も多いことから、下層植生の多様性は高く、現在では貴重となった植物種も多く含まれる。特に、高位泥炭層が発達した防風林の縁や農道沿いの草むらなどでは、高層湿原^{*1}の名残と思われるコバギボウシ、ハイヌツゲなどが細々と生育している。

かつての氾濫原とみられる肥沃で湿潤な防風林には、低木～亜高木としてエゾサンザシ（次頁写真2）、エゾノウワミズザクラ、カンボクなど

*1 ヨシやスゲといった植物が枯れ、堆積が進んだ結果、周囲よりも盛り上がった湿原

が、草本としてミツバベンケイソウ、シオデ、シロバナカモメヅル、アキノキリンソウなどが、わずかながら残存する。氾濫原環境は、河川改修の影響によって全国的に減少し、それぞれが断片化、小規模化していることから、その環境に依存する植物も絶滅が危ぶまれている種類が多い。

防風林内に広く見られる植物のうち代表的な種類を、表4に示す。



写真2 防風林に残るエゾサンザシ（東裏）

表4 防風林内に残る在来下層植生の代表例

低木類	エゾニワトコ、オオツリバナ、タラノキ、ナニワズ、フッキソウ、マユミ、ミヤマイボタなど
草本類	アキタブキ、エゾイラクサ、オオタチツボスミレ、オオバナノエンレイソウ、オオヨモギ、カサスゲ、クサソテツ、クサヨシ、コウヤワラビ、コバギボウシ、コバナアザミ、ザゼンソウ、ツボスミレ（ニョイスミレ）、バイケイソウ、ヒメザゼンソウ、ビロードスゲ、ホウチャクソウ、ミズバショウ、ワラビなど

※学名等は省略した

雑草的性質の植物も健在

郊外の路傍に生えている草本植物は、市街地に見られる種数と概ね共通している。一方で、路傍の側溝や農道脇などには、在来植物のうち、草刈りなどの人為的攪乱^{かくらん}にもよく耐える、いわゆる雑草的性質も持った種類も健在である（次頁表5）。側溝のような湿った場所には、セリ、ドクゼリ、エゾミソハギ、クサレダマなどが多い。道路法面や土手には、エゾノコンギクやキバナノアマナ、アズマイチゲ、キクザキイチゲなどが散見され（写真3）、これらは近傍地域の森林や山岳地域との共通種でもある。



写真3 道路法面のアズマイチゲなど（金沢）

表5 郊外の路傍や田畑に見られる植物

目	科	和名 学名	主な生育場所と備考
アブラナ	アブラナ	タネツケバナ <i>Cardamine occulta</i>	田畑に多い、町内にいくつかの近縁種がある
アブラナ	アブラナ	ナズナ <i>Capsella bursa-pastoris</i>	畑雑草、春の七草
イネ	イネ	エノコログサの仲間 <i>Setaria</i> spp.	路傍や畑、いくつかの近縁種を含む
イネ	イネ	メヒシバ <i>Digitaria ciliaris</i>	路傍や畑
イネ	イネ	ヨシ <i>Phragmites australis</i>	湿地に多い
イネ	ガマ	ガマ <i>Typha latifolia</i>	湿地に多い
イネ	カヤツリグサ	ビロードスゲ <i>Carex miyabei</i>	路傍に多い
オモダカ	オモダカ	サジオモダカ <i>Alisma plantago-aquatica</i> var. <i>orientale</i>	側溝や湿地
オモダカ	オモダカ	ヘラオモダカ <i>Alisma canaliculatum</i>	側溝や水田
カタバミ	カタバミ	カタバミ (広義) <i>Oxalis corniculata</i>	畑雑草
キク	キク	エゾゴマナ <i>Aster glehnii</i>	法面、路傍
キク	キク	エゾノコンギク <i>Aster microcephalus</i> var. <i>yezoensis</i>	法面、路傍
キク	キク	コバナアザミ <i>Cirsium boreale</i>	法面、路傍
キク	キク	ノゲシ <i>Sonchus oleraceus</i>	いたるところに普通
キントラノオ	トウダイグサ	エノキグサ <i>Acalypha australis</i>	畑雑草
キンボウゲ	キンボウゲ	アズマイチゲ <i>Anemone raddeana</i>	時に法面、本来は森林性
キンボウゲ	キンボウゲ	キクザキイチゲ <i>Anemone pseudoaltaica</i>	時に法面、本来は森林性
シソ	オオバコ	オオイヌノフグリ <i>Veronica persica</i>	路傍に多い
シソ	オオバコ	タチイヌノフグリ <i>Veronica arvensis</i>	路傍や畑
シソ	シソ	ヒメオドリコソウ <i>Lamium purpureum</i>	路傍や畑
ゼニゴケ	ゼニゴケ	ゼニゴケ <i>Marchantia polymorpha</i>	路傍や畑周辺
セリ	セリ	セリ <i>Oenanthe javanica</i>	湿地に多い、山菜としても利用
セリ	セリ	ドクゼリ <i>Cicuta virosa</i>	側溝や湿地、有毒植物として有名
ツツジ	サクラソウ	クサレダマ <i>Lysimachia vulgaris</i> subsp. <i>davurica</i>	側溝や湿地
ツユクサ	ツユクサ	ツユクサ <i>Commelina communis</i>	畑雑草
トクサ	スギナ	スギナ <i>Equisetum arvense</i>	路傍や畑周辺、孢子嚢穂は「土筆」
トクサ	スギナ	ミズトクサ <i>Equisetum fluviatile</i>	側溝
ナデシコ	スベリヒユ	スベリヒユ <i>Portulaca oleracea</i>	畑雑草、地方により食用
ナデシコ	タデ	イヌタデ <i>Persicaria longiseta</i>	畑雑草、別名「アカマンマ」
ナデシコ	タデ	オオイヌタデ <i>Persicaria lapathifolia</i> var. <i>lapathifolia</i>	畑雑草
ナデシコ	ナデシコ	オタンダミミナグサ <i>Cerastium glomeratum</i>	路傍や畑周辺
ナデシコ	ナデシコ	コハコベ <i>Stellaria media</i>	畑雑草、春の七草、町内にいくつかの近縁種がある

表5 (続き)

目	科	和名 学名	主な生育場所と備考
ナデシコ	ヒユ	シロザ <i>Chenopodium album</i>	畑雑草
フトモモ	アカバナ	アカバナ <i>Epilobium pyrricholophum</i>	路傍や側溝
フトモモ	ミソハギ	エゾミソハギ <i>Lythrum salicaria</i>	湿地に多い
ユリ	シュロソウ	オオバナノエンレイソウ <i>Trillium camschatcense</i>	時に法面、本来は森林性
ユリ	ユリ	キバナノアマナ <i>Gagea nakaiana</i>	時に法面、本来は森林性
リンドウ	キョウチクトウ	ガガイモ <i>Metaplexis japonica</i>	路傍や市街地に多い性草本

水田とその周辺

水田やその周辺に限って見られる植物(表6)もあり、イボクサ、ミズアオイ、オモダカなどが代表的である。特にオモダカとミズアオイ(写真4)、タイヌビエは中～大型の難防除雑草として稲作の支障にもなっており、年と場所によってはイネの生育と部分的に競合するほど多発している。



写真4 水田に咲くミズアオイ(金沢)

表6 水田と周辺の植物

目	科	和名 学名	備考
イネ	イネ	タイヌビエ <i>Echinochloa oryzicola</i>	大型の難防除水田雑草
イネ	カヤツリグサ	マツバイ <i>Eleocharis acicularis</i> var. <i>longiseta</i>	芝生状の難防除水田雑草
オモダカ	オモダカ	オモダカ <i>Sagittaria trifolia</i>	水田の難防除雑草、クワイの原種
オモダカ	サトイモ	ウキクサ <i>Spirodela polyrhiza</i>	複数の類似種がある
キク	キク	アメリカセンダングサ <i>Bidens frondosa</i>	湿ったところに普通、果実は「くっつき虫」
キク	キク	タウコギ <i>Bidens tripartita</i>	近年減少傾向の水田雑草
キントラノオ	ミゾハコベ	ミゾハコベ <i>Elatine triandra</i> var. <i>pedicellata</i>	小型の水田雑草
シソ	アゼナ	アゼナ <i>Lindernia procumbens</i>	小型の水田雑草
シソ	オオバコ	オオバコノメ <i>Gratiola japonica</i>	比較的希少な水田雑草
シソ	オオバコ	ミズハコベ <i>Callitriche palustris</i>	小型の水田雑草
ツユクサ	ツユクサ	イボクサ <i>Murdannia keisak</i>	畔際などに多い匍匐性雑草
ツユクサ	ミズアオイ	ミズアオイ <i>Monochoria korsakowii</i>	水田の難防除雑草
フトモモ	アカバナ	チョウジタデ <i>Ludwigia epilobioides</i> subsp. <i>epilobioides</i>	近年見られ始めた水田雑草、紅葉が見事



写真5 丘陵に広がるススキ群落（獅子内）

する姿が見られる（写真5）。

河川・水路の水際の植物

河川や水路などの水際には、ミクリやガマ、マコモ、ヨシ、カンガレイ、アブラガヤなどの抽水性^{*2}の湿生植物が生育し、流れに乏しい箇所



写真6 ヒルムシロ属が生育する排水路(川下)

には、ヒルムシロ属やタヌキモ属、ヒシ、エゾノミズタデといった、浮葉性や沈水性の水草も観察される。ヒルムシロ属は数種が分布し、流水中にも多い（写真6）。

特筆すべき植物としては、北海道内での分布確認事例が極めて限られ、全国的にも稀なコバノヒルムシロの比較的まとまった規模の自生地が、町内の水路に散在していることが挙げられる。この水草

*2 根を水底の土壤に張り、茎や葉の一部または全体が水面から上に出ている植物の性質を指す

は、細い糸のような沈水葉と水中茎を主として、長さ1～5cmほどのササの葉に似た浮葉をまばらに出し、目立たない花を水面から覗かせている。小型で地味な植物で、細く浅い水路に見られるため、注目される機会が少ない。

きのこ類

南部地域に見られるきのこ類としては、乾燥や日差しの下でも生育できる種類が多く、草地や芝生にはハラタケやコムラサキシメジ、コガサタケの仲間、ナヨタケの仲間などをよく見かける。これらは枯草などの

腐植質を分解する腐生菌^{ふせいきん}である。また、立ち枯れのエゾニワトコやニセアカシア、河畔林のヤナギ類には、アラゲキクラゲやエノキタケが時折観察される。公園などの植栽樹木周辺の地上には、イボテングタケやベニテングタケ、シロトマヤタケなどのほか、2000年代ころから「ポルチーニ」の名で知られるようになったヤマドリタケ、ヤマドリタケモドキも多少見られる。

樹木の枯れた部分や地際部には、ヒラタケ、カワラタケなども見る。当別にもともと自生していない外来樹種に特有のきのことして、ヨーロッパアカマツなどの二葉松類の周辺にヌメリイグチ、ハツタケ（写真7）やショウロ属の地下性菌が、ストローブマツなどの五葉松類にはキシメリイグチが見られる。



写真7 外来樹種に見られるハツタケ

コラム 泥炭層形成と湿原の歴史

当別町を含む石狩低地帯における泥炭形成の歴史は、概ね4000～5000年ほど前に遡るとされる。泥炭形成が始まる以前の縄文海進期には、当別町南部の平野部まで日本海が食い込んでおり、現在も内陸部に砂丘や砂嘴^{さし}の跡、それらに伴う海浜植生が点々と取り残されている。有名な例に石狩市の紅葉山砂丘が挙げられるが、新篠津村にも不明瞭ながら帯状に隆起した細砂層から成る、古砂丘あるいは当時の石狩川河口付近に存在した潟の一部とみられる地形がわずかに観察される。残丘上に限り、カシワ、ヒロハクサフジ、エゾスカシユリ、ヒメイズイといった、現在の石狩浜によく似た植生が観察される。

海進が終わって気候が寒冷化すると低位泥炭形成が進み、泥炭表面が水面に近づくと、やや貧栄養を好むヌマガヤや、ワタスゲ、ヤチスゲなどのカヤツリグサ科草本、低木のヤチヤナギ、ヤマドリゼンマイなどのシダ類などが生育し中間湿原が形成され、それらの遺体が中間泥炭となったと推察される。

中間泥炭よりもさらに植生遷移が進むと、やがて泥炭表層が水面より



写真8 排水路に露出した泥炭層と客土層（川下）

も盛り上がり、貧栄養条件ではミズゴケ類やモウセンゴケ、ホロムイスゲなどが優占する高層湿原化が進み、高位泥炭へと発達する。ミズゴケ類は泥炭を掘り下げた排水路の底部や窪地などに僅かに残存しているが、排水整備や富栄養化の影響は避けられない。

なお、高位泥炭が成立するまでには、植生遷移の過程で、低位泥炭や中間泥炭

を経るため、高位泥炭地に開墾された農地では、車道沿いの排水路の側面にも、深さが最大5m以上におよぶ泥炭層形成過程の一部を、東裏、蕨岱、西当別地区周辺などで断面として観察できる。

第2節 中北部地域の植生

(1) 丘陵から山岳に至る樹林帯

平野部と山間部の両要素

丘陵から山岳に至る樹林帯に覆われた地域で、高岡やスウェーデンヒルズ、弁華別、茂平沢、金沢、中小屋は、植生的な観点からは平野部と山間部の要素を併せ持つ。

この地域ではミズナラやイタヤカエデ、シラカンバ、シナノキなどを主とした落葉広葉樹林に覆われており、隣接する札幌市西部の低山と類似した植生が観察される（表7）。

人里近くに広がる森林の多くは、かつての伐採や山火事の後に再生した二次林である。

こうした里山的な山際や丘陵には、至る所に湧水起源の小規模な沢があり、源頭部にはハンノキとヤチダモの混交林がしばしば見られる。

表7 平野部と山間部の樹木

目	科	和名 学名	備考
アオイ	アオイ	オオバボダイジュ <i>Tilia maximowicziana</i>	蜜源、街路樹としても利用
アオイ	アオイ	シナノキ <i>Tilia japonica</i>	蜜源、街路樹としても利用
キントラノオ	ヤナギ	オノエヤナギ <i>Salix udensis</i>	町内のヤナギ類で最も普通
キントラノオ	ヤナギ	バッコヤナギ <i>Salix caprea</i>	林縁に散在
シソ	モクセイ	ヤチダモ <i>Fraxinus mandshurica</i>	沢の源頭や低湿地に群生
セリ	ウコギ	コシアブラ <i>Chengiopanax sciadophylloides</i>	山林に広く散在
セリ	ウコギ	タラノキ <i>Aralia elata</i>	林縁、原野、伐採後に群生
セリ	ウコギ	ハリギリ <i>Kalopanax septemlobus</i>	湿った肥沃な森に散在
ツツジ	エゴノキ	ハクウンボク <i>Styrax obassia</i>	山麓の斜面などに散在
ニガキ	ニガキ	ニガキ <i>Picrasma quassioides</i>	湿った森林に散在
バラ	ニレ	オヒョウ <i>Ulmus laciniata</i>	湿った肥沃地に散在
バラ	ニレ	ハルニレ <i>Ulmus davidiana</i> var. <i>japonica</i>	湿った肥沃地に多い
バラ	バラ	アズキナシ <i>Aria alnifolia</i>	山麓の斜面に散在
バラ	バラ	オオヤマザクラ <i>Cerasus sargentii</i> var. <i>sargentii</i>	山の斜面に散在、道内で最も一般的なサクラ
バラ	バラ	シウリザクラ <i>Padus ssiiori</i>	肥沃地に散在、根萌芽してクローン群落を作る

バラ	バラ	ナナカマド <i>Sorbus commixta</i>	街路樹として一般的、自生は山林に散在
ブナ	カバノキ	ウダイカンバ <i>Betula maximowicziana</i>	森林に散在、真樺とも称される高級材
ブナ	カバノキ	ケヤマハンノキ <i>Alnus hirsuta</i> var. <i>hirsuta</i>	伐採跡地に多い
ブナ	カバノキ	シラカンバ <i>Betula platyphylla</i> var. <i>japonica</i>	伐採跡地に多い
ブナ	カバノキ	ダケカンバ <i>Betula ermanii</i>	尾根や斜面に散在
ブナ	カバノキ	ハンノキ <i>Alnus japonica</i>	湿地に多い
ブナ	クルミ	オニグルミ <i>Juglans mandshurica</i> var. <i>sachalinensis</i>	川沿いに散在
ブナ	ブナ	ミズナラ <i>Quercus crispula</i> var. <i>crispula</i>	当別の森の優占種で堅果は「どんぐり」のひとつ
マメ	マメ	イヌエンジュ <i>Maackia amurensis</i>	山麓に散在
ミズキ	ミズキ	ミズキ <i>Cornus controversa</i> var. <i>controversa</i>	湿った肥沃地に散在
ムクロジ	ミカン	キハダ <i>Phellodendron amurense</i>	湿った肥沃地に散在
ムクロジ	ムクロジ	イタヤカエデ（広義） <i>Acer pictum</i>	当別の森の優占種、町内には亜種アカイタヤ(subsp. <i>mayrii</i>)、エゾイタヤ(subsp. <i>mono</i>)が自生
ムクロジ	ムクロジ	ハウチワカエデ <i>Acer japonicum</i>	山麓に散在
モクレン	モクレン	キタコブシ <i>Magnolia kobus</i> var. <i>borealis</i>	湿った肥沃地に散在
モクレン	モクレン	ホオノキ <i>Magnolia obovata</i>	湿った肥沃地に散在



写真9 丘陵林の景観（弁華別）

散在する針葉樹とその林床

この地域には、部分的にトドマツやカラマツといった針葉樹の人工林も散在している。針葉樹の人工林はしばしば強い台風によって将棋倒し状の風倒被害を受けることがあり、近年では2018（平成30）年9月5日に通過した台風21号によって、各所に被害が出た。

人里近くに広がる樹林は、天然更新で成立した箇所と人工的に植栽された箇所があるが、全体として人為的な大規模攪乱の影響を受けている地域である。

林床にはカタクリやエゾエンゴサクといった春植物や、エンレイソウ、ヨブスマソウなどの林床性草本類、あたかも草本のように地を這って育つ低木のフッキソウ、やや多雪な地域に多いエゾユズリハ（写真10）やハイイヌガヤ、ツルシキミといった常緑性低木類、オオカメノキやミヤマガマズミ、コマユミなどの落葉性低木類も生育している。また、林床を覆うササ類はクマイザサが多く、雪が溜まりやすい地形にはチシマザサ（ネマガリダケ）も見られる。



写真10 多雪地に特有のエゾユズリハ（道民の森）

（2）青山以北

発達した針広混交林

青山以北の深山と高標高地は、二次林や人工林に加えて自然度が高い地域も多く、特に山の中腹や青山奥には、トマツ等を交えた針広混交林が発達している。この地域の多くは、低山に見られる雑木的な木々や草本類に加えて、ミズナラなど湿潤な環境に生育する巨木が多い。巨木の幹や太い横枝には、しばしばパッチ状の地衣類やコケ類が着生し、それらに根を下ろす形で、ミヤマノキシノブ（写真11）など冷温帯性の着生シダの姿が時折見られる。



写真11 樹上に着生するミヤマノキシノブ（青山奥）

沢筋にはサワシバやサワフタギも見られ、岩が多い場所や少し標高が高い場所では、ナナカマドも点在する（表8）。

林床や沢の斜面には、積雪深に応じた高さのチシマザサ群落が目立つ。

表8 青山以北の樹木と草本類

ミズナラ、シナノキ、カツラ、イタヤカエデ、ハリギリ、ナナカマド、サワシバ、サワフタギ、ヤマブドウ、オニツルウメモドキ、サルナシ、チシマザサ、ミヤマノキシノブ
--

※学名等は省略した

青山以北の特徴

市街地周辺でも十分に多い積雪があるが、当別ダム以北はさらに豪雪であり、標高に比して雪解けは遅い。5月になっても各所に雪渓が見られ、その周りには里山ではすっかり花を終えたエゾエンゴサク、カタクリ、アズマイチゲ、キバナノアマナ、エゾノリュウキンカ、ミズバショウの花をしばしば見ることができる。

青山以北における特筆すべき植物として、タニウツギ、ドクウツギ、ヒメヤシャブシ、キバナイカリソウが挙げられる。これらは留萌や北空知地域と連続した分布を持ち、石狩低地帯以北のほとんどのなかでは、青山以北や月形町西部、石狩市厚田地区北部の辺りが南端である。タニ



写真12 川岸に自生するドクウツギ（青山奥）

ウツギ、ドクウツギ（写真12）、ヒメヤシャブシは低木であり、本来の生育地は雪の多い崖や急斜面の周りに多い。しかし、開けた場所であれば、比較的いろいろな環境に適応できるため、3種とも青山以北から路傍の草地や林縁、法面にも散見されるようになり、青山以北では比較的普通に見られるようになる。

当別川上流部の湿生植物群落

当別ダムの上流部には、水位変動の影響を受ける氾濫原的な環境も形成されており、ヨシやヤナギ類を主体とした湿生植物群落が認められる。

同地域は当別川の浸食作用によって形成された平地が続いており、牧草地などが広がっている。耕作放棄地や、ある程度の自然度を保った二次林も点在している（表9）。

表9 湿生植物群落の主な植物

シラカンバ、オノエヤナギ、ヤチダモ、オオアワダチソウ、ヨシ、オオイタドリ、エゾイラクサ、アズマイチゲ、ミズバショウ、エゾノリュウキンカ、エゾキンポウゲ

※学名等は省略した

山岳地帯の植物

西側のピンネシリや、尾根が連なる待根山、神居尻山といった樺戸山地には、亜高山から高山に至る植生が連続的に残されている。山麓の針

広混交林よりも標高を上げると、山腹にはダケカンバを主とする亜高山帯の樹林が広がっている。また、ダケカンバに混じって、イチイやナナカマドなどが、やや低木状となってまばらに生育する。低木層には、日本海側亜高山帯に一般的なムラサキヤシオやクロツリバナ、オオバスノキなども交える。

ダケカンバの樹林よりも標高を上げると、稜線にかけて草原性の高山植物の群落も小規模ながら確認できる。樺戸山地は稜線部を境に東側が新十津川町、浦臼町、月形町と接しているが、西風を強く受ける当別町側の稜線付近には樹林が発達せず、開けた風衝^{ふうしゅう}草原や崩壊斜面になっている（写真13）。稜線以東には、稜線ぎりぎりの標高までダケカンバ林が広がっているのとは対照的である。

風衝草原は、強い風を受ける草丈がやや低い草原であり、ノガリヤスの仲間などのイネ科草本類や、丈の低いチシマザサ群落によって覆われ、部分的には岩場も存在する。こうした環境は冷涼で、樹木に被圧されないことから、標高がそれほど高くなくとも、しばしば高山植物を交えた群落が見られる。

神居尻山は樺戸山地の中でも特に岩場と崩壊斜面が多く、また森林限界以上の高地や岩場には低木性常緑針葉樹のハイマツ群落が散在する。落葉樹が葉を落としている春や晩秋には、山麓からも青々と茂ったハイマツを確認することができる。一般的にはハイマツ帯と呼ばれる垂直分布に応じた群落を形成することが多いが、樺戸山系のハイマツは明瞭な



写真13 樺戸山地尾根上の植生

ハイマツ帯を形成せず、尾根付近や、比較的低標高な露岩地形などに散在する。

中北部地域のきのこ類

当別ダム周辺地域は深い積雪に加えて湿度も高いため、多くのきのこ類が見られる（表10）。特にナメコやムキタケ、タモギタケといった、冷温帯性の落葉広葉樹の枯れ木によく見られるきのこ類の多様性が高い。当別町においては、ナメコはカンバ類やシナノキ、ムキタケはシナノキやミズナラ、タモギタケはハルニレやヤチダモといった具合に、それぞれに発生しやすい樹種傾向がある。いずれも水気の多い深い森によく見られる樹種であるため、これらのきのこも必然的に、青山などの山奥に集中的に発生している。木材腐朽菌としては、先述したナメコ、ムキタケなどのほか、表10のようなきのこ類が見られる。

表10 きのこ（落葉分解菌と木材腐朽菌）

目	科	和名 学名	備考
タバコウロコタケ	タバコウロコタケ	カバノアナタケ <i>Inonotus obliquus</i>	カンバ類の生木に寄生し腐朽させる
タバコウロコタケ	タバコウロコタケ	モミサルノコシカケ <i>Phellinus hartigii</i>	トドマツの生木に寄生し腐朽させる
タマチョレイタケ	タマチョレイタケ	ウスバシハイタケ <i>Trichaptum hollii</i>	トドマツ枯れ木の分解者
タマチョレイタケ	タマチョレイタケ	カワラタケ <i>Trametes versicolor</i>	一般的な木材腐朽菌
タマチョレイタケ	タマチョレイタケ	ツリガネタケ <i>Fomes fomentarius</i>	一般的な木材腐朽菌
タマチョレイタケ	ツガサルノコシカケ	マイタケ <i>Grifola frondosa</i>	ミズナラ等の枯死部位に稀
タマチョレイタケ	マクカワタケ	ブナハリタケ <i>Mycleptodonoides aitchisonii</i>	ミズナラ、シナノキ等の朽木に多い木材腐朽菌
タマチョレイタケ	マンネンタケ	コフキサルノコシカケ <i>Ganoderma lipsiense</i>	広葉樹に一般的な木材腐朽菌
ハラタケ	キシメジ	ハイイロキシメジ <i>Clitocybe nebularis</i>	一般的な落葉分解菌
ハラタケ	キシメジ	ムラサキシメジ <i>Lepista nuda</i>	一般的な落葉分解菌
ハラタケ	クスギタケ	サクラタケ <i>Mycena pura</i>	一般的な落葉分解菌
ハラタケ	クスギタケ	ムキタケ <i>Sarcomyxa edulis</i>	ミズナラ、シナノキ等の枯木に多い木材腐朽菌
ハラタケ	タマバリタケ	エノキタケ <i>Flammulina velutipes</i>	広葉樹に一般的な木材腐朽菌
ハラタケ	タマバリタケ	ナラタケ <i>Armillaria</i> spp.	一般的な木材腐朽菌、時に生木に寄生、複数種を含む
ハラタケ	タマバリタケ	スメリツバタケ <i>Mucidula venosolamellata</i>	ミズナラ、シナノキ等の枯木に多い木材腐朽菌
ハラタケ	ツキヨタケ	エセオリミキ <i>Rhodocollybia butyracea</i>	一般的な落葉分解菌

表10 (続き)

ハラタケ	ツキヨタケ	モリノカレバタケ Gymnopus dryophilus	一般的な落葉分解菌
ハラタケ	ヌメリガサ	ホテイシメジ Ampulloclitocybe clavipes	カラマツ林などに多い落葉分解菌
ハラタケ	ヒラタケ	ヒラタケ Pleurotus ostreatus	広葉樹に一般的な木材腐朽菌、栽培品が市販
ハラタケ	モエギタケ	クリタケ Hypholoma lateritium	ミズナラ等の枯木に多い木材腐朽菌
ハラタケ	モエギタケ	クリタケモドキ Hypholoma capnoides	トドマツ等の枯木に多い木材腐朽菌
ハラタケ	モエギタケ	チャナメツムタケ Pholiota lubrica	落葉に埋もれた落枝に多く発生
ハラタケ	モエギタケ	ナメコ Pholiota microspora	カンバ類、シナノキ等の枯木に多い木材腐朽菌
ハラタケ	モエギタケ	ヌメリスギタケモドキ Pholiota cerifera	オノエヤナギ等の枯死部位に多い木材腐朽菌

樹木の根と共生関係を結ぶ菌根菌

生きた樹木の根と共生関係を結ぶ菌根菌と呼ばれるグループもある。菌根菌は樹木の細根と共生することで光合成産物を受け取る一方、樹木が単独では得にくい無機質を与えたり、近接する樹木との養分のパイプラインのような役割を担ったりすることで生育を助ける。特に樹木の初期生育を著しく促進することから、腐生菌とは異なる意味で、こちらも森林生態系において重要な役割を担っている。マツ科の針葉樹や、ブナ科、カバノキ科の樹木の周りには様々な菌根菌の子実体が見られ、夏から秋の森を彩っている。

当別町の森でよく見かける種類と、その共生相手の樹種を、表11に示す。沢沿いなどにも多い木材腐朽菌と比べると、比較的開けた環境を好む種が多いようである。森林内のほか、道民の森をはじめとする適度に人の手が入った環境にも、多様な菌根菌が見られる。

表11 森林で見られる主な菌根菌

きのこ（菌根菌）の種類	主な共生相手の樹種
アカハツモドキ	アカエゾマツ
アカモミタケ	トドマツ
イボテングタケ	マツ科、ブナ科、シナノキ
カワリハツ	ブナ科、カバノキ科
キンチャヤマイグチ	カバノキ科、ヤマナラシの仲間
シモフリシメジ	ブナ科、マツ科、時にカバノキ科
シロトマヤタケ	マツ科ほか
シロヌメリイグチ	カラマツ属

ススケヤマドリタケ	主にトドマツ
タマゴタケ	カバノキ科、ブナ科、マツ科ほか
チチタケ	ブナ科
ツルタケ	ブナ科、カバノキ科ほか
ニオイコベニタケ	カバノキ科
ハナイグチ	カラマツ属
ベニテングタケ	カバノキ科、マツ科
マツノコケイロヌメリガサ	アカエゾマツ
ヤマイグチ	カバノキ科
ヤマドリタケ	カバノキ科、マツ科
ヤマドリタケモドキ	カバノキ科、ブナ科ほか

※学名等は省略した

コラム 豊富な山菜

当別町では寒さと多雪のためにタケ類が露地で育たないので、たけのこ採りといえばチシマザサのことである。チシマザサは北方系の大型のササだが、意外にも寒風が苦手なため、真冬には全身をすっぽりと雪に覆われ保温された状態でなければ、凍傷で枯れ込んでしまう。従って、群落高は概ね最大積雪深と一致し、良質なたけのこを得るために雪深い深山、それも特に日本海側に人が集まる。

そのほか、町内の森林でよく採集される山菜類としては、ウド、タラノキ、ギョウジャニンニク、ユキザサ（あずきな）、アキタブキ、ヤマトキホコリ（青みず）、クサソテツなどがある。ウドは個体数が比較的多く、肥沃な斜面などに生えた太いものが人気である。山地のタラノキは森林内よりも林縁や伐採跡地、風倒跡地に多く、町内で特に人気が高い。「青みず」と称されるヤマトキホコリは、道内の分布域が比較的限られた山菜であるが、一部は市販もされている。クサソテツは同じシダ類のゼンマイやワラビと異なり、あく抜き不要で食べられるので人気があり、湿潤地に群生することからよく採集されている。

第3節 特筆すべき植生と場所、取り組み

これまでに、当別町内の地域ごとの植生傾向を大まかに紹介してきた。しかし町内には、ひとことでは表現しきれないほど特殊な植生や、人の暮らしとのかかわりの中で守られてきたや植物と場所が多く存在する。本節では、それらの中から特筆すべき例を取り上げる。

(1) 道民の森

野生植物が各所に生育

当別町を代表する施設のうち、自然観察やハイキングといったレクリエーションと自然保護を両立した施設として、全道的に有名な場所として道民の森が挙げられる。当別川流域の広い範囲にまたがり、青山ダム地区、神居尻地区、牧場南地区、一番川地区、青山中央地区、月形地区の六つの拠点からなる。このうち月形地区を除く5地区が当別町域に位置している。

道民の森は各拠点とも樺戸山地の麓に位置することから、ピンネシリや神居尻山などの、樺戸山地を代表する山々の玄関口としても賑わっている。

また道民の森とその周辺には、登山道を含む様々な難易度の遊歩道が整備されており、日本海側多雪地に特有の植生や人工林、二次林、そして原生的な面影を色濃く残す森など、当別町北部で見られる森林環境がひととおり観察できる。特に神居尻地区は標高300～400m程度に位置しているにもかかわらず、一般的には亜高山や深山でしか見られない野生植物が各所に生育している。そのため登山をしなくてもハイキング気分で、それらを楽しめることで人気が高い。



写真14 雪溪とカタクリ（道民の森）

神居尻地区の一部や青山中央地区などでは、耕作放棄地を森林へと戻す植樹活動が行われ、環境教育の場としても活用されている。

(2) 北海道医療大学の森

復活した森

金沢地区に位置する北海道医療大学の敷地には、総面積約15haの森林に覆われた、北方系生態観察園がある。400種類程度の様々な植物が植栽されている薬学部附属薬用植物園と隣接しており、薬用植物園と併せて国内外から年間平均3000人ほどが訪れている。薬学的な学びの場というだけでなく、環境教育や森林浴による健康維持、レクリエーション活動の場としても広く親しまれている。

この森は、石狩低地帯に広がっていた原野を埋め立てる際に、客土用として表土を採取された丘陵の一部であり、伊達山の山麓に位置する。一時は植生がほぼ失われていたが、整備開始前にはミズナラ、イタヤカエデ、シナノキなどを主とする落葉広葉樹からなる二次林が再生した。

整備前はほぼ全山の林床がクマイザサ群落に覆われており、林床植生は単調であったが、総延長2kmほどの散策路が設置され、自然観察の場として2001（平成13）年に北方系生態観察園が開園した。



写真15 森に囲まれた北海道医療大学当別キャンパス

開園の前後に、植生の専門家と教職員らによって何度も植生調査が行われた。その過程でクマイザサ群落の一部に、ごく小さな野草の芽生えや未開花個体が見つかった。これらを被陰していたササを手作業で刈り取って少しずつ林床を整備した結果、僅かに残存していたと考えられるカタクリやエゾエンゴサク、ニリンソウなどの開花が始まり、以来、サ

ササ刈りが本格化した。当初は種数も個体数も限られていたが、整備作業への賛同者が増えるに従い、大学内外のボランティアも多く加わってササ刈りの範囲を広げていった。すると、年数を重ねるうちに、それまで見られなかった様々な植物が現れるようになった。

来訪者で賑わう「薬木の径」

園内は起伏に富んだ地形をしており、北東側から南西側へと沢が流れ、その東西に尾根状の地形が広がっている。ササ刈りの成果が特によく現れたのは、東側の尾根に整備されたメインルート「薬木の径」の周辺である。薬用植物園側からの登り口の斜面には、5月初旬、カタクリとエゾエンゴサク、エンレイソウ、ナニワズなどの混生群落広がりを(写真16)、やや遅れて尾根にはニリンソウが一面に咲く。札幌近郊で、JRの駅から徒歩で訪れることができ、手軽に観察できるカタクリの群生地ということもあり、薬用植物園温室に咲く熱帯性のヒスイカズラやバナナといった珍しい熱帯植物の観察と併せて、4月下旬から5月にかけては、多くの来園者で賑わっている。



写真16 手入れされた林床に咲くカタクリ・エゾエンゴサク群落（北海道医療大学）

(3) 天然の沼

中小屋円沼の水生植物

月形町と境を接する中小屋の山裾に、当別町では珍しくなってしまった天然の沼がある。国道275号に隣接する円沼（写真17）は、東側が丘



写真17 中小屋円沼



写真18 ネムロコウホネとホッカイコウホネ（中小屋円沼）

陵から連なる森林に面し、それ以外の面は畑に囲まれ、まばらな樹林とヨシ群落、抽水植物群落を経て沼辺に至る。当別町内でもあまり有名とはいえない沼だが、水生植物の多様性や自然度の高さは、単独の池沼としては町内随一と思われる。

この沼には、当別町では唯一の現存個体群と思われる浮葉性水草のネムロコウホネが多数自生しており、それよりも岸に近い

箇所には抽水性のコウホネや、両種の雑種起源で中間的な形質を持つホッカイコウホネとみられる植物も混生している（写真18）。水中にはコウホネの仲間のほか、フサモやフトヒルムシロ、ヒシなどが生育している。水際にはヨシ群落などの草丈が高い抽水植物群落が広がり、その周辺には農地開発以前の姿を留めた様々な草本類が観察される。コウホネの仲間に交じり、園芸由来と思われる外来種のスイレンが見られるため、増殖すれば特にネムロコウホネを被圧してしまう可能性が懸念される。

ネムロコウホネをはじめとする植生は、直線距離で1.6kmほど北東に位置する月ヶ湖沼群（月形町）と共通しており、現在は農耕地によって隔てられている円沼と月ヶ湖が、かつては地理的連続を持った湿地帯であったことが想像される。このような冷水性の水生植物は、富栄養化によって衰退してしまうことが多いが、円沼の植生は比較的貧栄養状態を保っている観点からも、貴重な水域と考えられる。

（4）丘陵から低山に点在する低標高ダケカンバ林

注目すべきダケカンバ二次林

道内の広葉樹林を代表する樹種の例として、カバノキ科カバノキ属に含まれるシラカンバとダケカンバがある。一般に、道内（特に南西部）の低標高地ではシラカンバが多く、標高が高い場所や寒冷な場所ではダケカンバが多くなる。道東の一部などで海岸付近や平地にダケカンバが自生する例が見られるが、当別町を含む道央圏では、通常標高500mを超えた辺りから見られ始める、典型的な亜高山植生である。

しかし、当別町内の丘陵や低山には、標高わずか数十メートルからダ

ケカンバ林が存在する箇所が点在している。おそらく町内で最も低標高のダケカンバ林は、北海道医療大学を含む金沢地区の丘陵に存在するものと思われる。南側斜面から尾根周辺、一部は沢に面した斜面の上部にかけて、途切れ途切れではあるが、比較的広範囲にわたってダケカンバを優占種とする二次林が広がっている。薬学部附属薬用植物園の裏手にあるダケカンバ二次林は、標高わずか40m程度にすぎない。また、道道11号の沿線にもダケカンバを多数含む落葉広葉樹林が広がっており、道路からも容易に観察することができる。

ダケカンバ自体は全道的によく見られる樹種ではあるが、低標高の個体群は、その起源や群落成立のメカニズムも含めて興味深い存在であり、学術的に注目する価値があると考えられる。本町市街地から金沢方面へと続く、学園通り沿いに植栽されたシラカンバの並木には、所々にダケカンバが混在している。町内の山林では、両種の自然交雑とみられる中間的特徴を示す個体も、時折見受けられる。

〈引用・参考文献〉

- 梅田安治・清水雅男・出村昌史「サロベツ泥炭地の形成過程: 泥炭地の形態的研究 (Ⅱ)」『北海道大学農学部邦文紀要 15(1)』(1986年)
- 遠藤泰造「樺戸山系南部における崩かい地の植生について」『日本林學會北海道支部講演集 10』(1962年)
- 大沼弘樹「当別町でコバノヒルムシロを確認」『菩多尼訶32』(2014年)
- 大沼弘樹「江別市南東部の路傍で見られる水辺の植物」『北方山草 第33号』(2016年)
- 大沼弘樹「オモダカの塊茎で「おせち」は作れるか?」『北方山草 第37号』(2020年)
- 勝見精一「樺戸山系南部における崩壊地について」『日本林學會北海道支部講演集 10』(1962年)
- 神山和則・宮地直道・粕渕辰昭・大塚紘雄「地理情報システムを用いた石狩泥炭地における土地利用の変遷と客土の実態解析: 湿原と泥炭農用地の管理」(第3報)『日本土壌肥科学雑誌 66(5)』(1995年)
- 川上源太郎・小松原純子・嵯峨山積・仁科健二・廣瀬亘・大津直・木村克己『「北海道当別町川下地区で掘削された沖積層ボーリングコア(GS-HTB-1・GS-HTB-2)の層序学および堆積学解析 地質学雑誌118(4)」(2012年)
- 黒岩俊生「トゥレブ(オオウバユリ)実習のための資料集成」『年報いわみざわ: 初等教育・教師教育研究』(1988年)
- 『(仮称)石狩郡当別町西当別風力発電事業 計画段階環境配慮書』(合同会社石狩郡当別町西当別陸上発電所、2020年)
- 權平昌司「北海道の泥炭地開発に就いて」『農業土木研究 20(4)』(1953年)
- 嵯峨山積・外崎徳二・近藤務・岡村聰・佐藤公則「北海道石狩平野の上部更新統～

- 完新統の層序と古環境 地質学雑誌 116(1)」(2010年)
- 佐藤謙「北海道における自然林再生に関する一考察」『開発論集 83』(2009年)
- 棚橋生子・福地稔・佐藤孝弘・真坂一彦・長坂有・佐藤弘和「牧野跡地に植栽した樹木の生育について」(会員研究発表論文)『日本森林学会北海道支部論文集 59』(2011年)
- 土井康生・村上利男「北海道におけるタイヌビエの発生生態に関する地域性」『北海道農業試験場研究報告 119』(1977年)
- 当別町史編さん委員会『当別町史』(北海道石狩郡当別町、1972年)
- 当別町観光協会公式HP「見晴らしの水松」
- 道民の森公式HP
- 東裏開基百年記念事業記念誌編纂委員会編『ふるさと百年』(1984年)
- 藤原渥一郎「当別川流域における地すべり地・崩壊地の推移」『砂防学会誌 29(2)』(1976年)
- 北海道医療大学薬学部附属薬用植物園・北方系生態観察園・北方系伝統薬物研究センター公式HP
- 松下勝秀・五十嵐八枝子・梅田安治「石狩泥炭地の生成とその変貌」『地下資源調査所報告 57』(1985年)
- 村田文江・進藤貴美子「アイヌ文化の追体験学習: 舞踊とトゥレブの採取・加工・調理を中心に」『年報いわみざわ: 初等教育・教師教育研究』(1988年)
- 森田弘彦・土井康生「ミズアオイとコナギの分類と北海道における分布について」『雑草研究 25(4)』(1980年)
- 山河重弥・伊藤一幸「雑草モノグラフ 2 オモダカ (*Sagittaria trifolia* L.)」『雑草研究 49(3)』(2004年)
- 米倉浩司・梶田忠「BG Plants 和名-学名インデックス (YList)」(2003年-)